

岩手県埋文センター文化財調査報告書第25集

長倉遺跡発掘調査報告書

—八戸平原開拓建設事業関連発掘調査（昭和55年度）—

(財)岩手県埋蔵文化財センター

序

岩手県は古くから縄文の宝庫といわれて参いました。近年縄文時代のみでなく、各時代にわたって多くの遺跡、遺物が発見されております。

宝庫といわれても遺跡は有限であり、その保護には文化財行政にたずさわる関係者のみではなく県民こぞって心を配っております。一方県民生活をより豊かにすることも望まれ、各種の開発事業も推進されております。この埋蔵文化財の保護と開発事業の調整を行ない、よりよい方向へと進むよう望んでおります。

民間企業による開発と共に、行政による開発も活発化し、特に本県の場合、東北自動車道関連と共に農業基盤整備事業が大規模に行なわれております。農業基盤整備事業は而による開発のため多数の遺跡が一挙に湮滅する恐れがあります。

本年度調査致しました盛岡市太田蝦夷森古墳、九戸郡軽米町長倉遺跡も農業基盤整備事業にかかわる遺跡でございます。又両者とも周辺において過去に調査が行われ、太田蝦夷森古墳においては蕨手刀、勾玉をはじめとして多くの副葬品を出土させ長倉遺跡では縄文時代後期の遺物が多量に出土しております。

今回の調査においては、両調査とも遺跡の範囲外の部分を行

なつたと思われ、僅かに遺物を採取したにとどまりました。しかしこの様な地味な調査が埋蔵文化財保護のためには必要な事であると考へております。同時に地形と遺跡とのかかわりについで種々の資料を得る事ができました。

今後、両地方における調査に、今回調査の資料が活かされる事を希望いたし、両調査にご協力下さいました各位に厚く感謝申し上げます。

昭和 56 年 3 月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

長 倉 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手県九戸郡軽米町大字長倉
2. 事業主体 東北農政局八戸平原開拓建設事業所
3. 事業名 八戸平原開拓建設事業
4. 調査主体 (財) 岩手県埋蔵文化財センター
5. 調査担当者 主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 島山靖彦
6. 調査期間 昭和55年10月15日～11月14日
7. 調査対象面積 $1,500m^2$
8. 発掘面積 $1,500m^2$
9. 遺跡記号 NK88
10. 協力機関 軽米町教育委員会

目 次

序

I 調査に至る経過	1
II 位置・地形	1
III 基本層序	2
IV 調査方法	2
V 遺 構	3
VI 遺 物	4
VII ま と め	5

図 版 目 次

図版1. 位置図	6
2. 地形図	7
3. 調査範囲図	8
4. 遺構配置図（全体）	9
5. // （A地区）	10
6. // （B地区）	11
7. AS-03ピット（平面図 断面図 写真）	12
8. AS-07ピット（ // // // ）	13
9.-1 遺跡全景（西から）	14
9.-2 A地区（南から）	14
9.-3 B地区（北から）	14
10.-1 A地区（北から）	15
10.-2 B地区（南から）	15
11. 出土遺物（実測図 写真）	16
12. // （拓本）	17

I 調査に至る経過

岩手県における農業基盤整備事業は、昭和40年代から水田中心の大規模圃場整理事業が行なわれている。昭和50年代になり、県北地区を中心に畑作圃場整備事業が活発に行われてきている。

本調査の原因である東北農政局八戸平原開拓事業は、岩手県北部の軽米町、青森県南東部の南郷村にまたがる大規模畑作圃場整備事業である。事業は昭和51年より昭和60年までを事業年度としておる。現在調査対象区域としているのは、13工区の軽米町長倉地区で、工区内の遺跡は26ヶ所確認されている。

遺跡発掘調査は、県教委文化課と東北農政局八戸平原開拓建設事業所の間で、工法等による保存を図るなどの調整が行なわれた後に切り土部分に限って行なわれている。調査は（財）岩手県埋蔵文化財センターが、委託を受けて行なっておる。

昨年度は軽米町長倉の長倉№14遺跡を行ない、本年度は長倉遺跡を発掘調査した。調査は畑作圃場のため取入れ後しか行なえないという制約はあったが、調査区域が、遺構集中区からはずれていたため、予定日数内に終了する事ができた。 (瀬川司男)

II 位置・地形

位置 本調査地点(図版1)は軽米町より北北東に約4.4km、瀬月内川と雪谷川の合流点から東に2.2kmの地点に位置し、岩手県の北端ともいえる地点で、ここより県境へは北に約1.2kmである。5万分之1地形図上で本地点の経、緯度を測定すると、北緯40°21'29"、東経141°29'26"となる。

調査対象範囲(図版3)は、平面直角座標第10系のX+39,865~39,975km Y+55,845~55,880kmの範囲の中にあって、高さは標高274~269mの範囲にある。

昨年(昭和54年度)調査した長倉№14遺跡は本調査地点より西北西に約1kmの位置である。

明神下遺跡 この遺跡の調査は、昭和39年5月に工藤康夫氏他6名によって4日間実施され、縄文時代後期~晩期の資料が層序別に良好な状況で発掘されている。

さて、この遺跡の位置であるが、「所在地 九戸郡軽米町大字長倉第4地割92の1番地(俗称明神下)」となっている。ところが、4地割92の1番地は長倉部落の中であり、明神下は今回の調査地点一帯をいい、あきらかに別々の地点を指している。他に位置を知る手がかりとしては「遺跡は、八戸湾に流れ出る新井田川の一小支流の水源に向って、東に傾く斜面を中心として存在する。」と「標高約300米である」という説明である。もちろん、この地形と標高は前記の地割、地番や明神下に該当しないのである。

小田野哲憲氏が調査に参加した地元軽米町の工藤氏から聞いた話によれば、遺跡所在地は明神下ではなく、坂の上が正しいのだそうである。坂の上は、明神下より一段高い地点で、標高、地形共に該当す

る。

いづれにしても、確証がなく、正確な位置を求めることができないが、坂の上が最も可能性が高いように思われる。図版2の(C)の位置で、土器片の採集も可能である。

地形 本地点は地形区分によると沢田丘陵部に位置する。黒間山(415m)山地に続く沢田丘陵は比較的侵食が進んでいて、谷密度も高く起伏量も大きい。谷底平野は見られないが谷底平野状の緩斜面が部分的に見られる。

支流である瀬月内川と雪谷川にわずかの低地が見られるが、新井川は周囲の地質が硬い岩石で侵食に強いため峡谷となり、谷底平野の幅も極めて狭く、かつ断続的になる。

沢田丘陵地帯は古生代三疊紀とみられる北上山地北部型古生層がNW—SE方向の走向で垂直に近い地層傾斜で分布する。丘陵の軽米町側は泥岩と輝緑凝灰岩の互層であるが、遺跡の所在する長倉側は珪岩質岩石と輝緑凝灰岩の互層で、長倉部落(谷部)は珪岩質岩石、部落を南北に挟む尾根部は輝緑凝灰岩となる。調査地点は部落の北側の尾根上に位置することになるが、本地点附近から東側一帯は北上山地北部型古生層をローム(火山砕屑物)が覆って分布する。

表層は、十和田、八甲田系と推定される火山灰からなる黒ボク土である。全層腐植質で下層に浮石層が出現する。

日本考古学年報17(昭和39年度)

北上山系開発地域土地分類基本調査 三戸、階上缶

III 基本層序

本調査地点における基本層序は、地表から順に、I層、II—1層あるいはII—2層となる。

I層 黒褐色土層 0.1～0.2m耕作によって攪乱されていて、南部浮石粒を包含している。

II—1層 南部浮石の再堆積層で南部浮石と黒色土が互層になっている。調査区域の中でも地表高の低い西側で第II層となる。

II—2層 八戸火山灰層 調査区域の地表高の高い東側で第II層となる。

VI 調査方法

調査地区は、東北農政局八戸平原開拓建設事務所、岩手県教育委員会文化課、岩手県埋蔵文化財センターの三者立会、協議によって設定され、現地に表示されてあった。

調査地区のほぼ中央には東西方向の農道があって、これを発掘することができないので、農道を境に南の部分をA地区、北の部分をB地区とした。(図版4)

発掘は調査対象地区全域について遺構の有無を確認するため全面発掘することとし、第I層の除去にはバック・ホーを使用した。

遺構精査に先き立ち、調査区域内で一番地表高の高い農道東側に基準点(P₀)を設置し、この基準点からA、B両地区に最も長い直線が通る約-30°の方向に基準線を設定した。

平面位置の表示は基準点を座標原点として、基準方向に平行および直交する任意座標を使用することとした。高さの表示についても、基準点を0mとする任意水準とした。

検出遺構についてはA、B地区毎に通し番号を付して整理し、精査は検出状況がピット状のもので住居跡になる可能性のあるものは4分法、それ以外は2分法をとった。溝状のものは要所、要所に断面観察の畔を残しながら発掘した。

実測は全体の遺構配置について1/50、全体の等高線実測を1/200、主要ピットは平面図、断面図共1/20の各々縮尺でおこなった。

写真はモノクロームとカラーリバーサルフィルムを使用し、主として35mmカメラによって撮影した。

V 遺 構

第I層の耕作土を除去すると南部浮石再堆積層上面か八戸火山灰層上面があらわれるが、遺構はこの面で検出した。(図版4.5.6.)

検出された穴状および溝状の痕跡は観察や精査の結果次の二つに区分できる。まづ第一は、自然の営力によって作られたもので、伏流水の水穴がある。地元の人の話しでは、大雨の後に突然畑の中から水が吹き出したり、馬や牛の足が穴におちたりしたのだそうである。検出面での形状は一定ではなく、大きさも大小さまざまである。穴の埋土を除去すると必ず地下の伏流水の流路(多くの場合この流路は空洞となっている)に通じている。

第二は、人の手によって作られたもので、これらはさらに二つに区分できる。一つは、穴や溝の埋土が第I層と同一で、タバコの根、ブドウの根、ビニール、木杭、針金などが入っていたり、沢水を上水として利用するためのビニールパイプ埋設溝であったり、ごく最近の耕作などによって作られた痕跡である。

もう一つは、埋土の状況が前者と異なり、多少なりとも古いと思われるもので、AS-03とAS-07ピットがこれである。

AS-03ピット このピット(図版7)はA地区東側中央の地表高の高い位置で検出された。検出面は八戸火山灰層の上面で、東から西へ傾斜している。遺構の一部は地区外に入っているが、検出面での形状は2.8×2.3mのやや長円形と推定している。深さは0.3~0.5mあって、底面は2.0×1.6mの長円形で、ほぼ水平な平面をしている。

埋土は3層に区分できる。上層より、第1層は表上より少し黒っぽいシルトの暗褐色土である。第2層と第3層は基本的に同じシルトの褐色土であるが、第2層の方が南部浮石粒を多く含んでいるため第3層と区分した。埋土内からの遺物は1点もなかった。

AS-07ピット AS-03ピットの北西に約4mの近い所で検出された(図版8)。検出面は南部浮石再堆積層上面で、ここも東から西に傾斜している。検出面での形状は1.4×1.1mとほぼ円形で、深さは0.7~0.9mである。底面は0.8×0.6mのほぼ円形で、水平な平面をしている。

埋土は3層に区分できる。上層より、第1層は表上より少し黒っぽいシルトの暗褐色土である。第2層はシルトの極暗褐色土に南部浮石粒を含み、第3層は少し粘性をもつシルトの極暗褐色土で、南部浮石粒をほとんど含まない。埋土内に遺物は1点もなかった。

VI 遺物

出土遺物はきわめて少量で、わずかに個体として見られるものは1点だけで、後はわずかの縄文土器片であった。

円筒鉢型土器 (図版11) BSX-03伏流水の水穴の埋土途中から一個体の約半分ぐらいの口縁部から胴部の破片がまとまって出土したもので、底部はまったくない。口径は推定で16~17cmぐらい、口縁形態は平縁である。高さは現存部で25cmあるが、せいぜい30cm前後の器高であったと思われる。胎土には多量の繊維が含まれている。外面の文様は、地文が口縁部から底まで、ゆるい単節(RL)の斜縄文が施されている。口頸部文様は、地文の上に重ねて、複節(RLR)の側面圧痕を口唇部直下に水平に施文し、次にこの線の下に鋸歯文のを施し、さらに鋸歯文下に頂点のくる三角形の中にだけ水平の施文をしている。内面調整は口縁部は横方向、胴部では縦方向の調整が見られる。

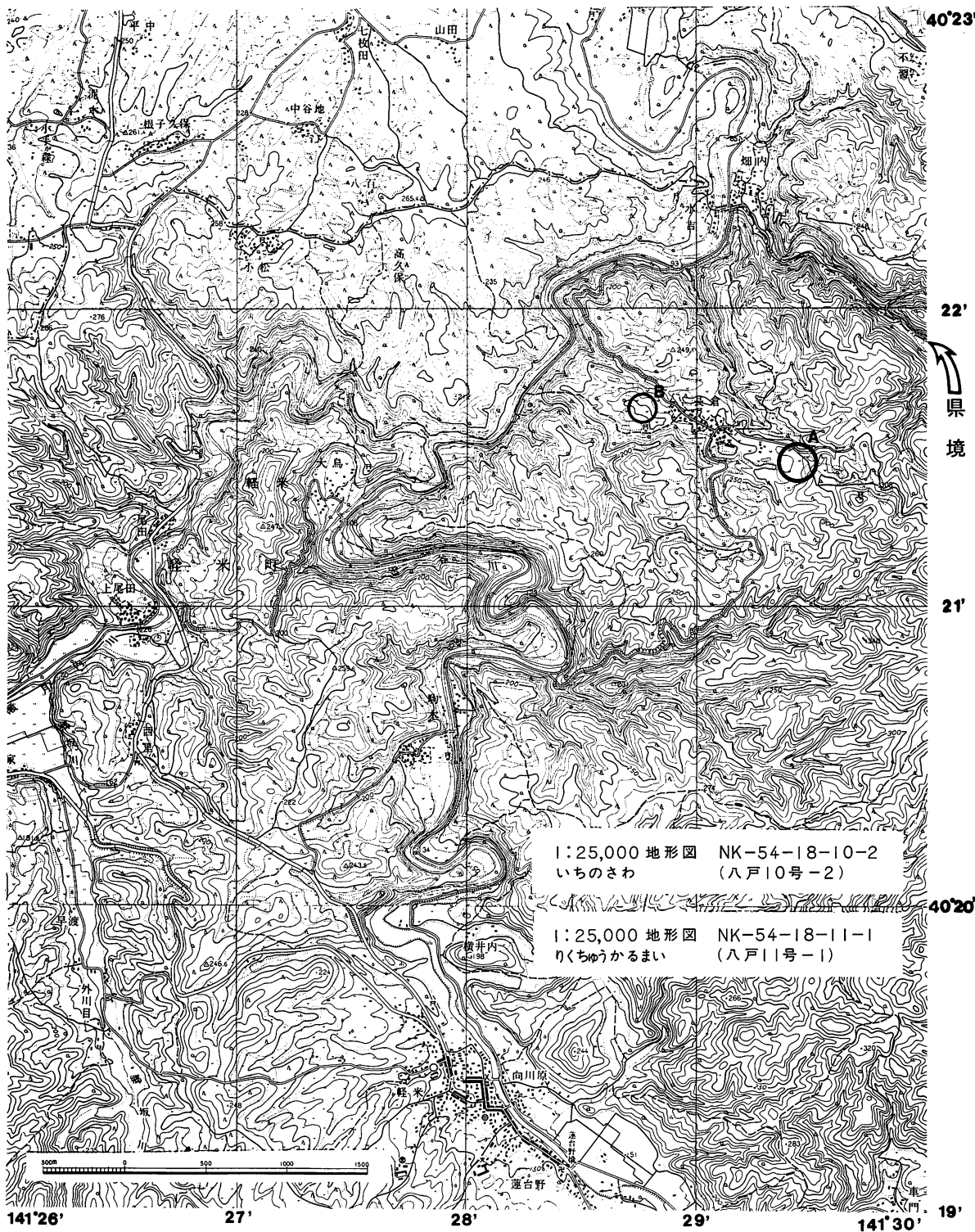
縄文土器片 土器(図版12)は全部で11片である。図版12の1はAS-05、2はBS-15共に伏流水の水穴の埋土から出土した。残り3~11は全部第1層中よりの出土である。1は平縁の口縁部破片で口頸部文様として上段(LR)、下段(RL)の平行撚糸側面圧痕を4条施文し、胴部には羽状縄文(RL+L)を施文している。胎土にはわずかに繊維が見られる。2は波状口縁部の破片で、沈線文が施文されている。3は多軸絡糸体回転文(L)、胴部破片で胎土にわずかの繊維が見られる。6は撚糸文(RL)、残りは全部単節(RL)の回転文である。

Ⅶ ま と め

本調査で検出された遺構は、AS-03ピット、AS-07ピットである。しかし、両ピット共年代や時代は共伴遺物もないためまったく不明である。

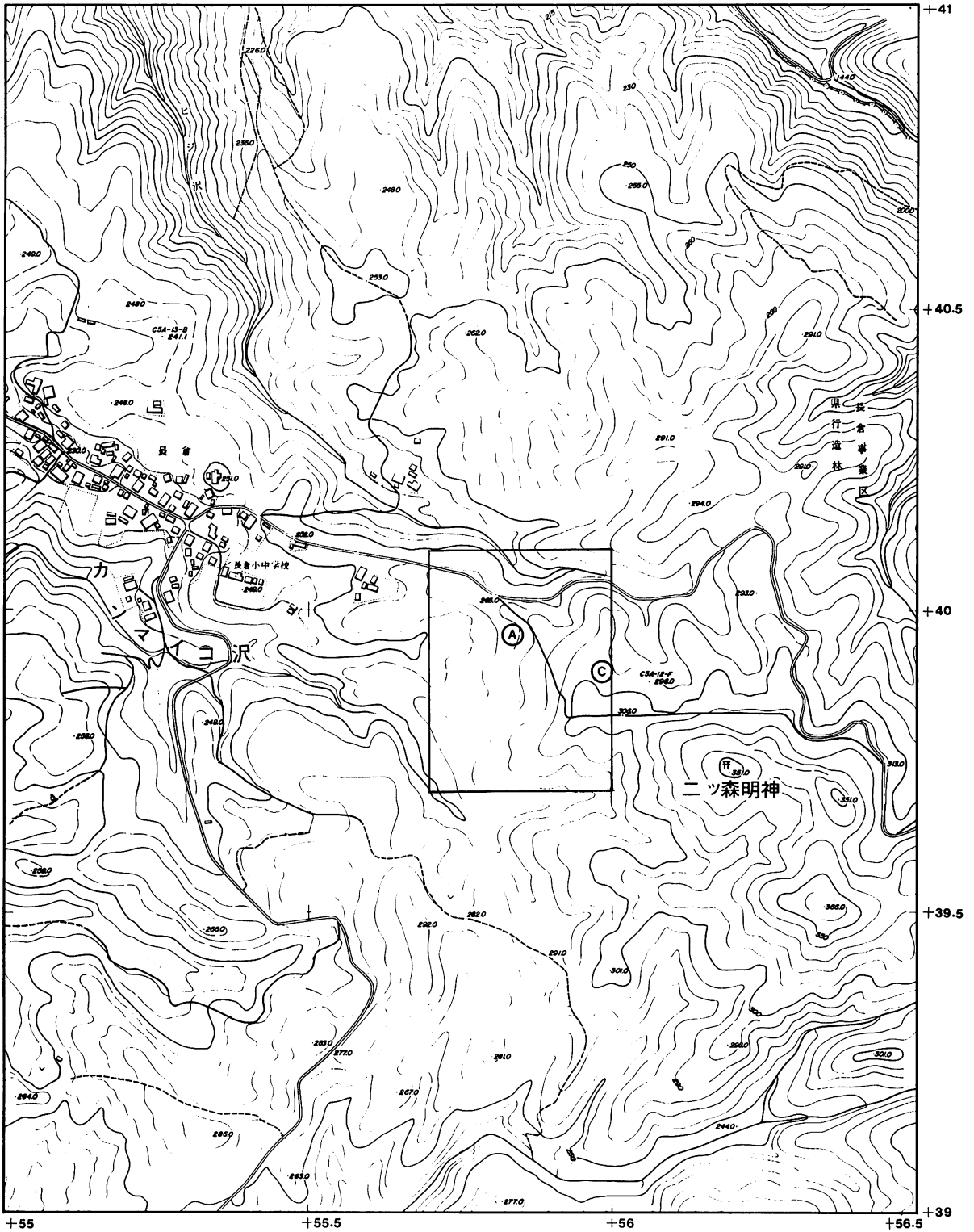
出土遺物については、円筒鉢型土器の口頸部文様が例を見ないものであるが、円筒下層式と見て誤りないものと考えられる。村越 潔氏のご教示によれば「地文だけを見れば下層a～b、繊維の入り具合では下層c～d₁」であった。その他の土器片を見るかぎりでは縄文時代の前期、中期、後期がある。

遺構、遺物とも、量的にも少なく、長倉遺跡の性格や、昭和39年に調査された明神下遺跡と長倉遺跡との関連を本調査によって明らかにすることはできなかった。 (国生 尚)



図版1 位置図

A : 長倉遺跡
B : 長倉No.14遺跡



+55

+55.5

+56

+56.5

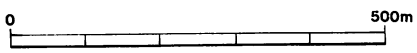
+41

+40.5

+40

+39.5

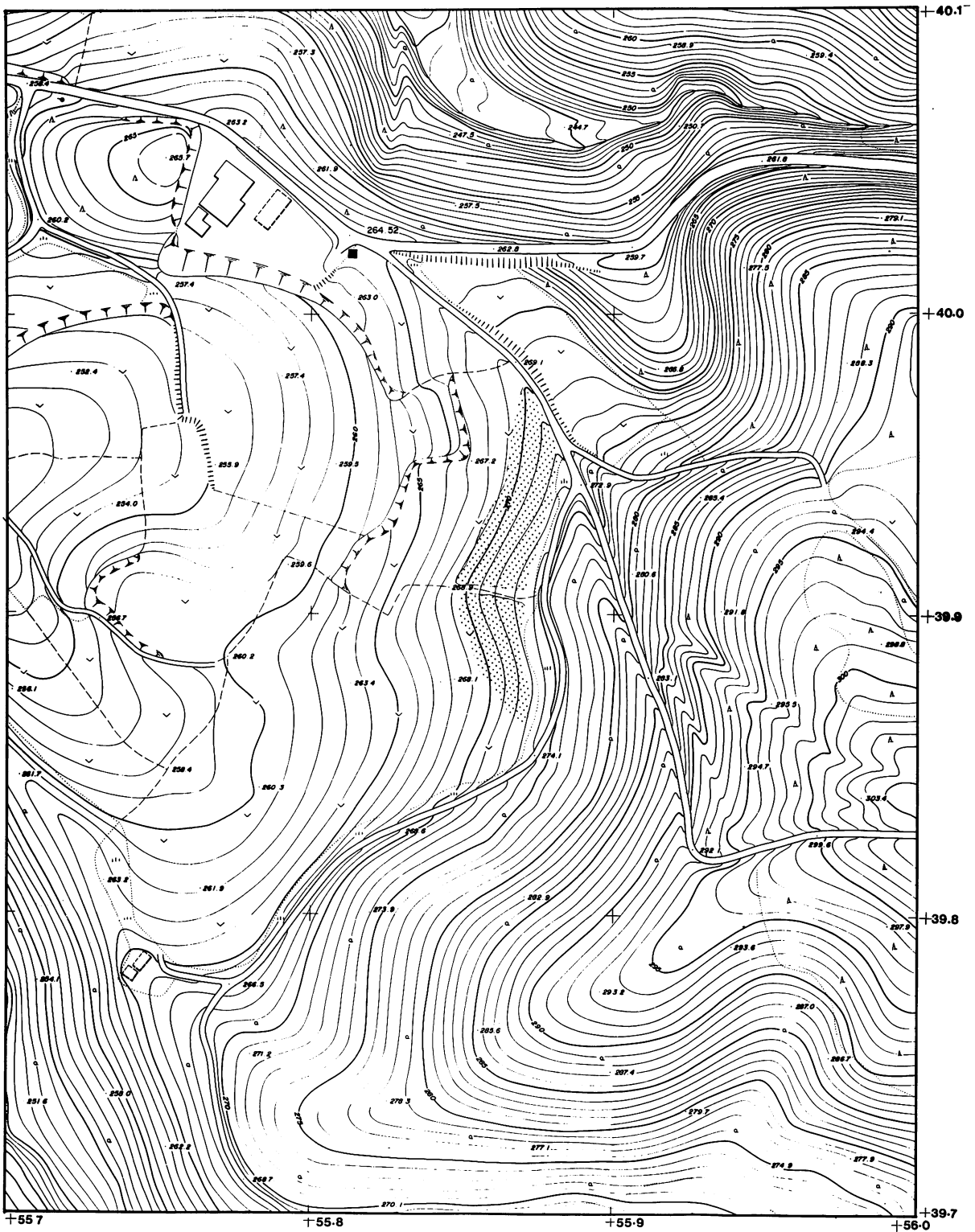
+39



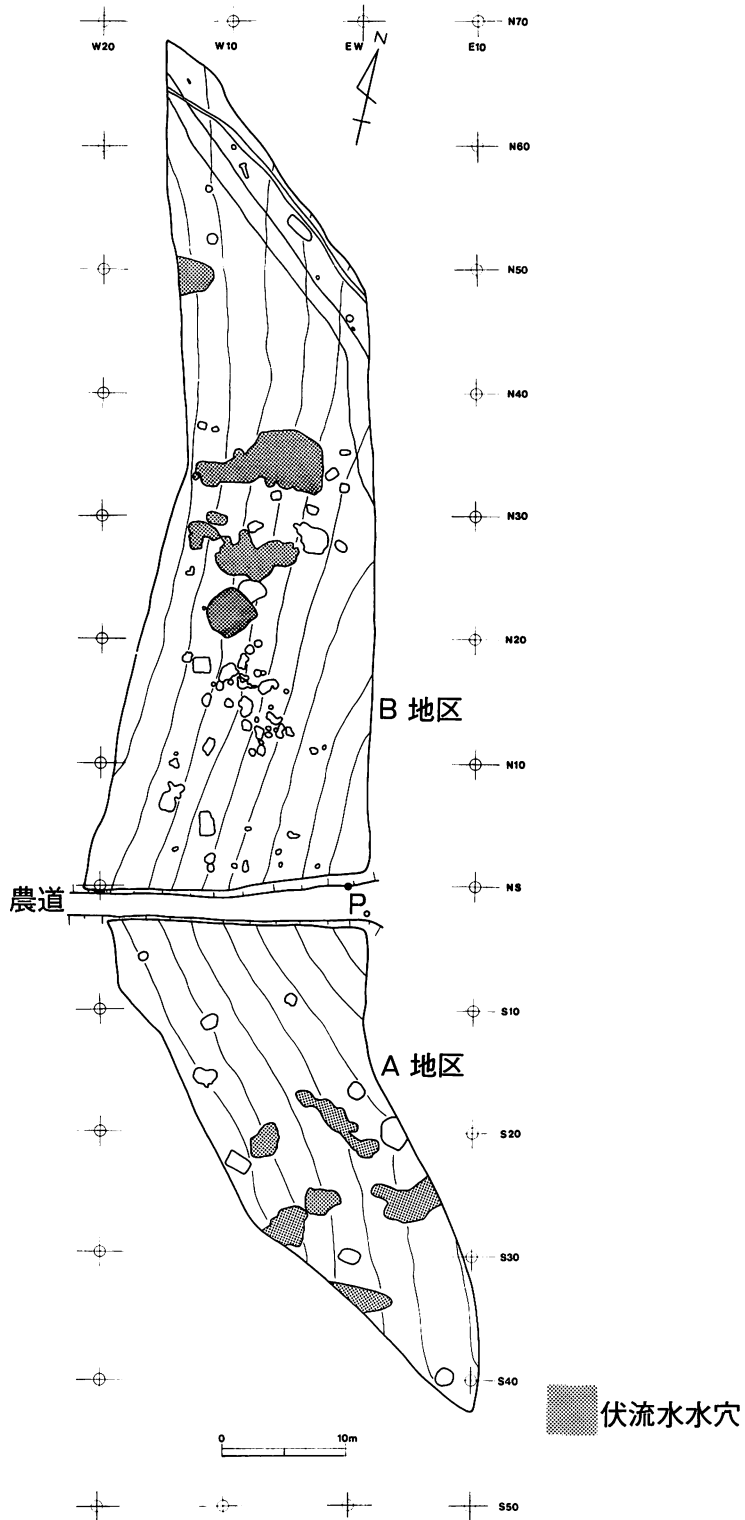
A. 長倉遺跡

C. 明神下遺跡

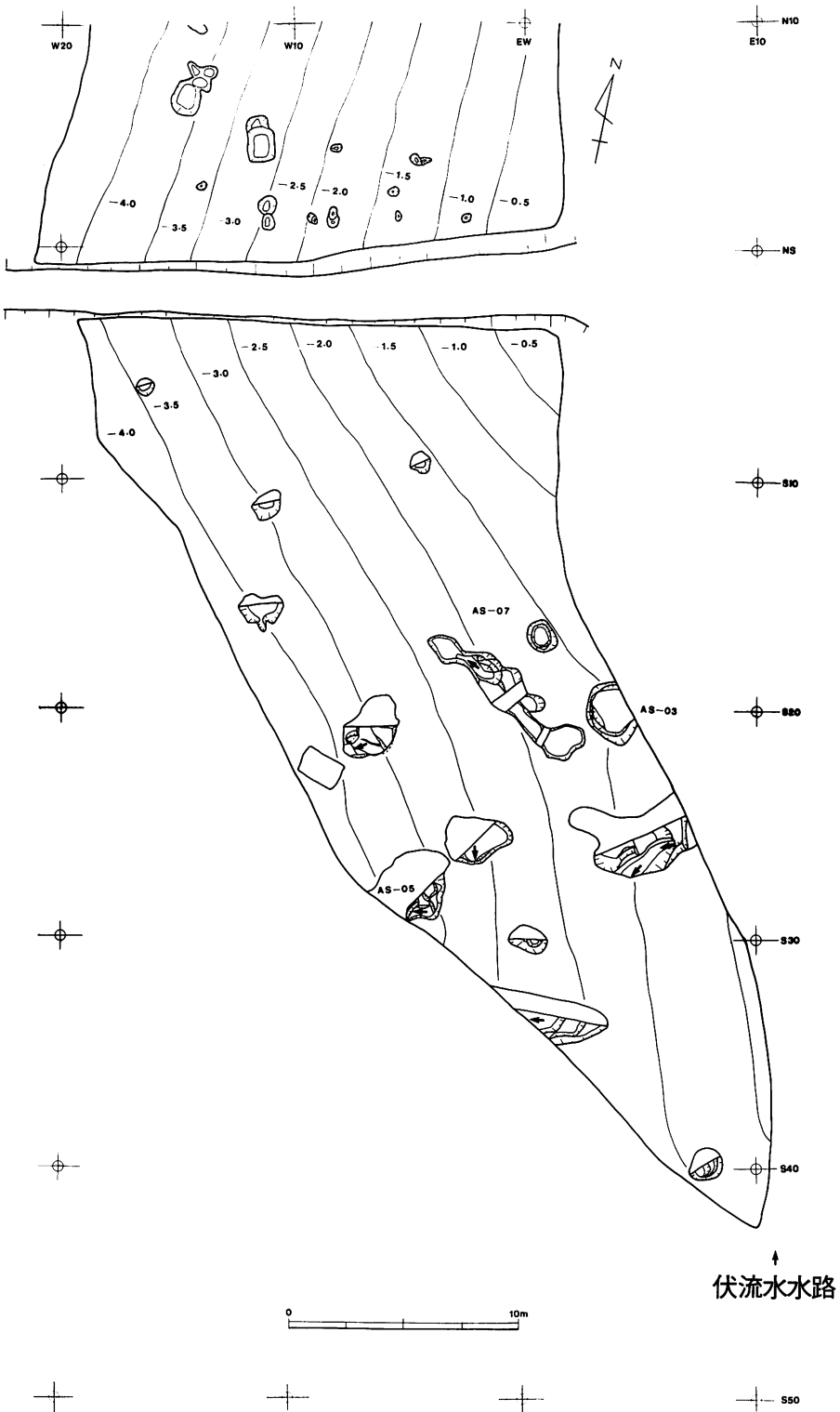
図版 2 地形図



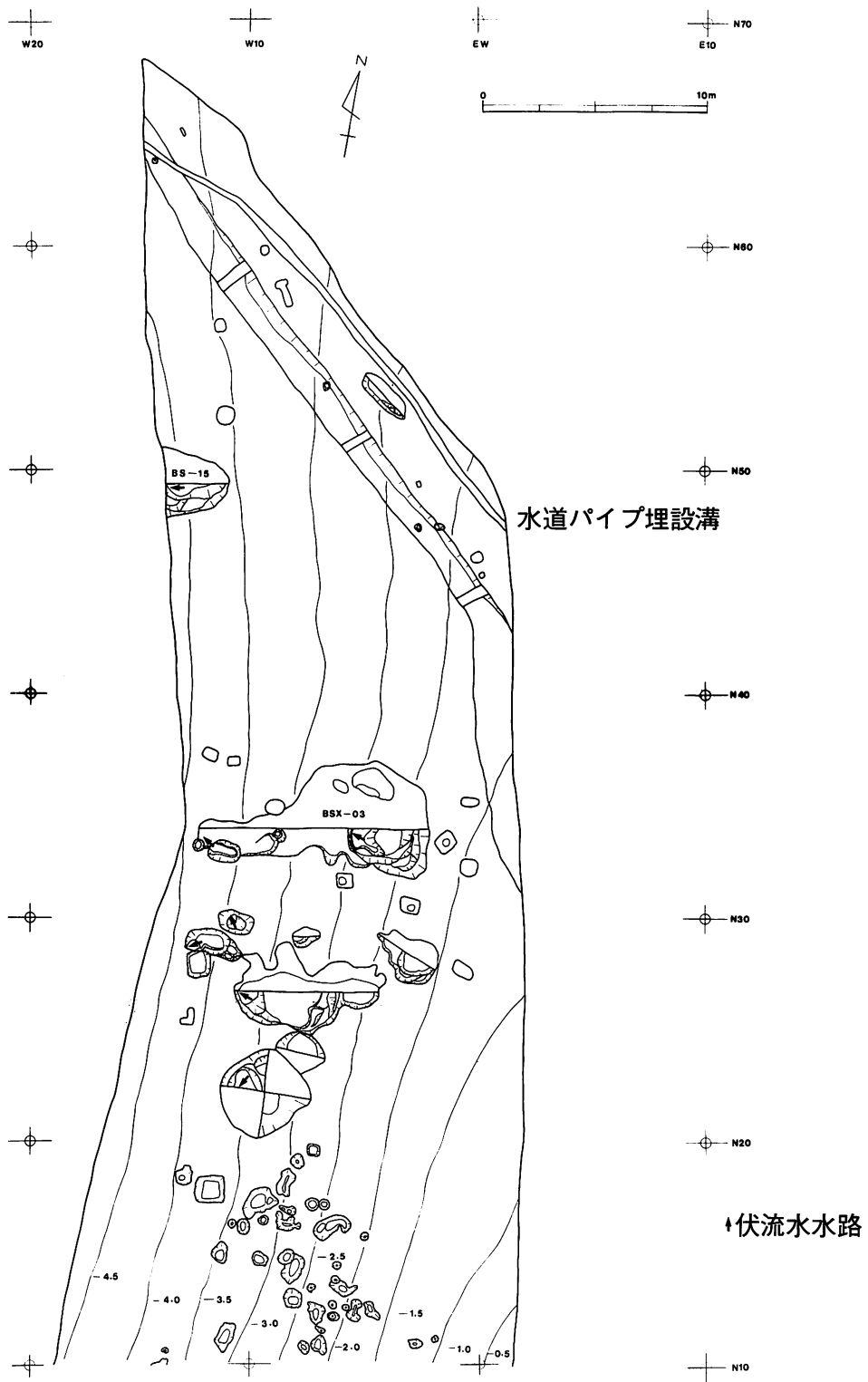
図版 3 調査範囲図



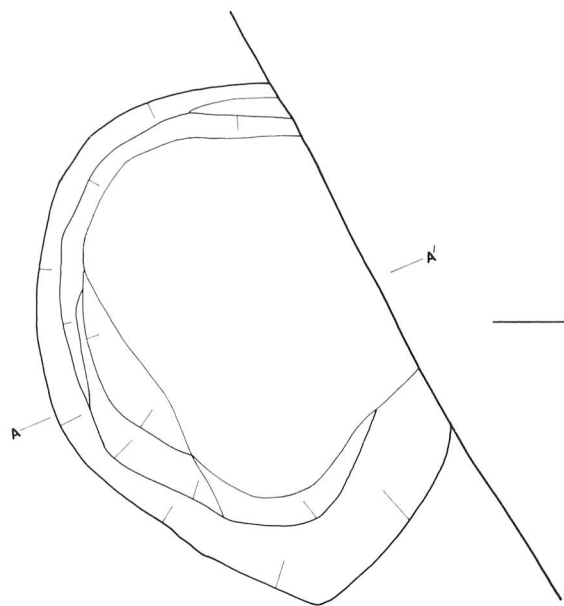
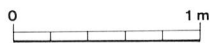
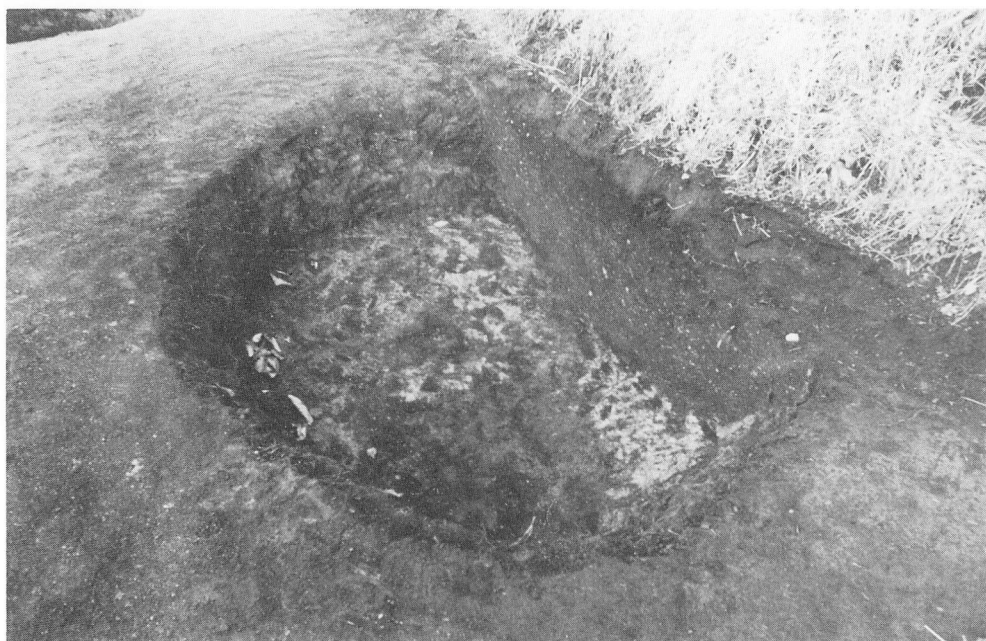
図版4 遺構配置図(全体)



図版5 遺構配置図(A地区)

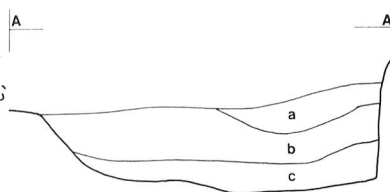


図版6 遺構断面図(B地区)

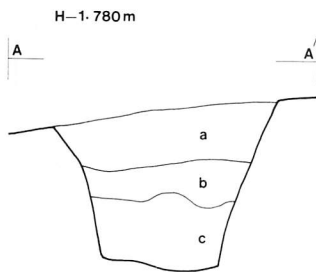


H-1630m

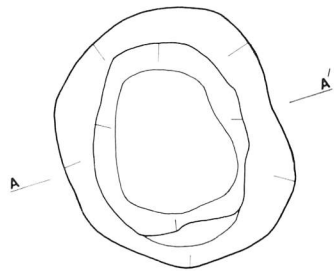
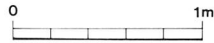
- a. 暗褐色土 (7.5Y R 3/3)
- b. 褐色土 (7.5Y R 4/4)
- c. " (") 南部浮石粒を多く含む



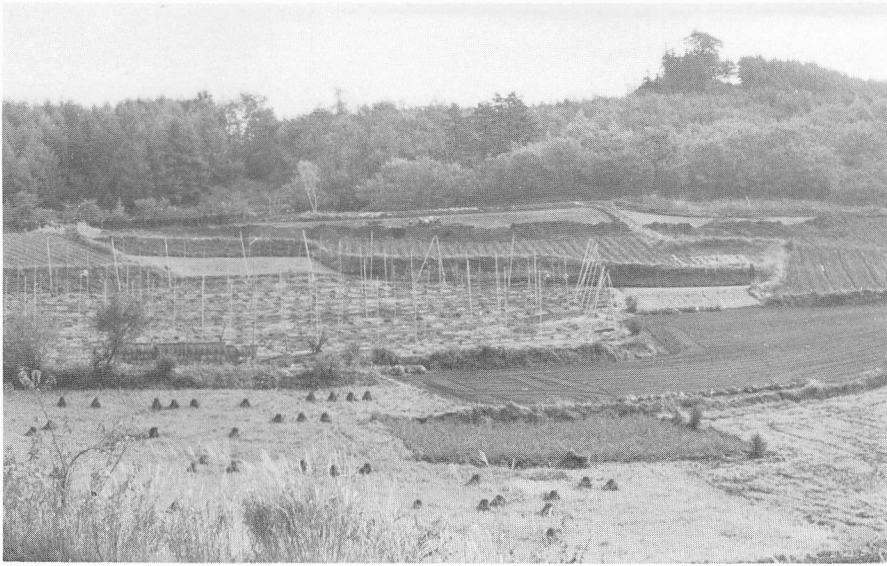
図版7 AS-03ピット



- a. 暗褐色土(7.5Y R 3/3)
- b. 極暗褐色土(7.5Y R 2/3) 南部浮石粒を多く含む
- c. //



図版 8 AS-07ピット



9-1
遺跡全景
(西から)



9-2
A 地区
(南から)



9-3
B 地区
(北から)

図版 9

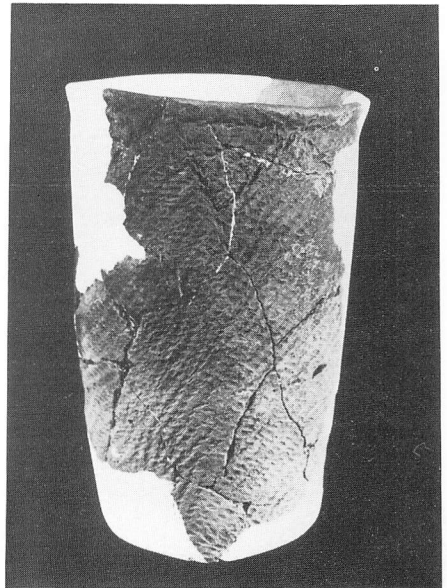
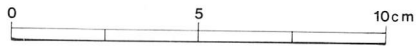
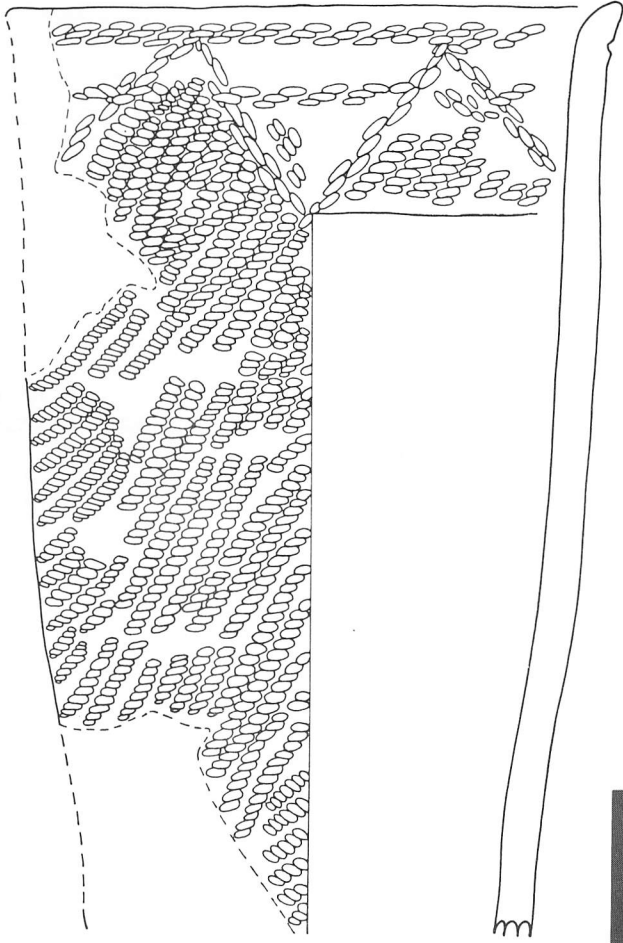


10-1 A地区(北から)

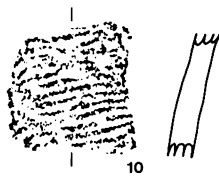
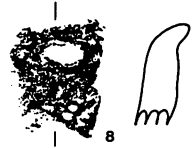
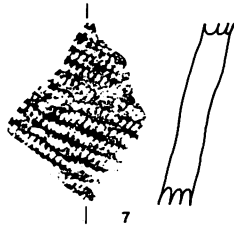
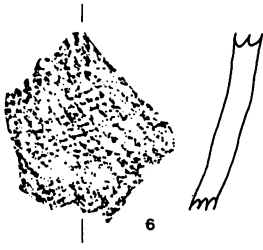
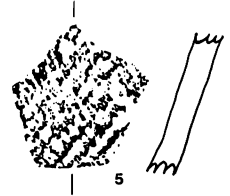
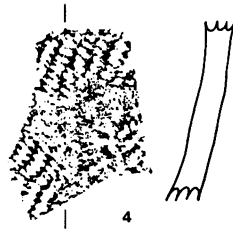
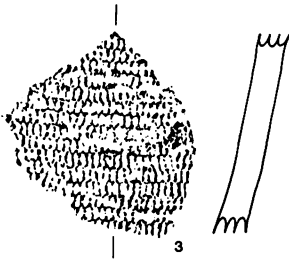
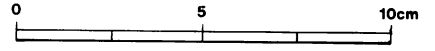
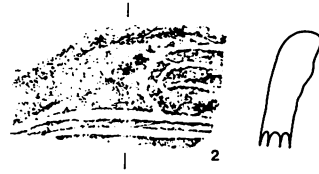
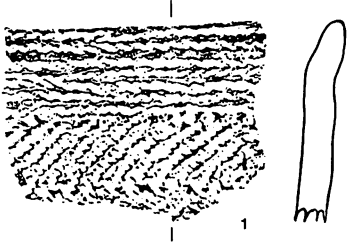


10-2 B地区(南から)

図版10



図版11 出土遺物



图版12 出土遺物(拓本)

岩手県埋文センター文化財調査報告書 第25集

長倉遺跡発掘調査報告書

—八戸平原開拓建設事業関連発掘調査（昭和55年度）—

印刷 昭和56年3月20日

発行 昭和56年3月25日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号

☎(0196) 661-6622

印刷 河北印刷株式会社

〒022 盛岡市本町通2丁目8番7号

☎(0196) 23-4256
